

合資会社桔梗屋筆筒店

川越筆筒の名家

創業は1884年（明治17年）だが当家の過去帳によると、すでに江戸・天保年間（1830－43年）には“桔梗屋与八”という屋号で商いを営んでいたようだ。現4代目当主の関根喜三郎社長が以前、蔵を整理した時に“うどん・そば・酒食渡世”あるいは、“清解湯・産前産後・風邪”の文字が残る木製の看板を見つけ、かなり古くから飲食業や薬屋の商売を行っていたことが分かったという。ところが飲食にしる薬屋にしる、営んでいた人物名は定かではない。おまけに屋号は“桔梗屋与八”で同じだが、過去帳に残る名字は“大野”で、現在の関根とは違っている。「なぜ、名字が大野から関根に変わったのかまったく分からないが、桔梗屋与八はこの川越で代々襲名してきたのだろう」と喜三郎氏は言う。

初代喜三郎は筆筒職人で、同じ川越市六軒町の田中家から婿養子となり、いま製造現場となっている松江町で桐筆筒の製造を創業した。川越の桐筆筒は、江戸時代の寛永年間（1624－43年）に時の川越城主だった松平信綱が産業政策として作らせたと伝わるが、本格的に桐筆筒の製造が始まったのは明暦の大



2代目栄吉の時代には職人も40人を超えていた
＝松江町の本社前で集合写真に収まる従業員たち



小売部門強化のために建築した
新富町のショールーム

火（振袖火事＝1657年）以後と言う。それまで衣服は長持ちなどの箱物に入れていたが、持ち運びが容易であったことが災いして、明暦の火災では長持ちを持って逃げ惑う庶民で大混乱を起こし、多くの死者が出てしまった。そこで幕府は据え置き式の筆筒を製造するように指導、桐筆筒が本格的に作られるようになったという。その後、参勤交代で江戸に来る各藩の大名から注文が寄せられ、川越の桐筆筒は評判となって製造が盛んになった。

明治の文明開化とともに、衣服も和服から洋服になり桐筆筒の需要も増加。家業は順調に発展していくが、当時から筆筒の材料となる材木を桐に限っていた。軽くて湿気や火に強いことから筆筒の材料として最適だったからで、その桐を近くの敷地に植林して材料としていたが、現在では福島県会津の桐にこだわり購入している。筆筒の材料に桐を使用するのは、他の木材よりも適しているからで、植林してから25－30年ほどで木の寿命を迎え

る。今ではあまり表現しないが、“嫁入り道具に桐箆筒”と言って、娘が生まれたら庭に桐を植えていたが、2本や3本の桐を庭に植えても箆筒は作れない。

箆筒には板の厚い部分と薄い部分を使い分けているため、箆筒一棹で桐の木を5-6本使うそうで、とてもではないが狭い庭では一棹分の桐を植えることは難しい話だ。その桐は寒い冬の2月に伐採してから3年ほど寝かせる。短くても1年は寝かせないと、あくが抜けきれず役に立たないからという。しかも水はけのよい盆地で、寒暖の激しい山の斜面に植樹した桐が最高級と重宝がられている。環境が悪い中で育った桐ほど年輪が詰まっているからで、最近では安い中国産の桐箆筒も出回っているが、それらの桐で琴を作っても音が出ないそうだ。

技術力の高い2代目

初代喜三郎の時代から始めた自家での植樹は、2代目の栄吉の代まで続く。3代目の常吉の代になって会津の桐を仕入れるようになり、この先もこだわりを持って会津の桐だけを使っていく方針だ。その2代目栄吉は、大正から昭和の戦前にかけて家業を盛り上げた人物



初代喜三郎、2代目栄吉の時代は桐の木を川越市内で植林、桐箆筒の材料としていた。写真は初代の頃のもので、植林した桐を点検する職人たち



松江町の建物を解体した時に蔵の中から出てきた江戸時代の看板。桔梗屋と八の屋号と葉の名前書きがされている

で、箆筒職人としては技術レベルの高い親方の一人だった。当時、川越市内には200人ほどの親方いて、それぞれ職人を抱えていた。生産量も年間10万棹を越すほどの最盛期で、栄吉はその親方衆の中でも3本の指に入る人物だった。向上心も強く常に桐の板を見てはこの部分に使えるかを考え、特に板を切る木取りには研究熱心だったという。職人衆を大事にする親方でもあったようで、初代喜三郎譲りの人情家で、2代にわたって職人の生活をとことん支えた。こんな逸話が残っている。

桐箆筒を作るには、切った板をはめ込む際に糊で接着する。もちろん、木の釘で止める部分もあるが、1棹の箆筒を完成させるのに当時は2合分のご飯粒を糊にして接着していた。しかし、自宅で作業する職人にはお腹を空かせた子供もおり、材料と一緒に手渡された米2合のうち、半分ほどを子供たちに食べさせてしまい、残りを薄めたり麦を混ぜたりして糊にすることがしばしばだったという。薄めたり混ぜたりすると、接着力が弱くなり

商品として不良品になることから、親子2代にわたって何も言わずに米を常に3合渡していた。案に『1合は食べてもいいよ』という配慮で、その心遣いが職人衆の心を打ち、大勢の箆筒職人が集まってきたという。ちなみに、明治から昭和初期にかけては桐箆筒を買うのに、現金だけでなく米も持ってきたそうで、それほど貴重な米だった。

3代目が事業拡大へ

3代目を継いだのが常吉で、現4代目の実父。戦中戦後という苦難な時代を持ち前の才覚で乗り切り、それまでの個人商店から法人組織に変更して事業を拡大させている。最初に手掛けたのが法人化で、1947年(昭和22年)に『合資会社桔梗屋箆筒店』を設立させ、1955年(昭和30年)には市内新富町に土地を購入。創業地の松江町は箆筒製造の工場とし、新富町は小売専門の店舗にした。現在ショールームになっている建物で、製造部門と小売分門を分けることで経営の安定化を図ったのである。

ちょうどその頃、中高層の団地が建設され始め、和箆筒に加え洋風の箆筒が人気となり、3代日常吉もそのブームに押されて桐箆筒と洋箆筒の混合で婚礼3点セットの発売を始めた。しかし、洋箆筒が大量生産されだすと市



松江町の本社・工場内には裁断された桐の板が所狭しに置かれている



伐採した桐の丸太を仕分けする職人たち=昭和時代

場環境は一挙に変化、安い洋箆筒に桐箆筒は負けてしまい、次々と桐箆筒製造業者が倒産や廃業に追い込まれてしまう。その荒波を乗り切れたのは、同業他社が“三方桐”や“四方桐”、“前桐”など桐以外の材料で製造していたのに対し、総桐箆筒をメインに製造していたためだった。“三方桐”などの桐箆筒は持ちが悪く、その事が購入者に見抜かれ消費者離れを起し、総桐以外の製造業者は退場を求められてしまったのだ。結局、数多くあった川越市内の桐箆筒業者はことごとく姿を消し、今では当社だけが生き残っている。

4代目で安定路線に

箆筒製造の職人は、長らく親方から材料を受け取って自宅で作っていたが、報酬は1棹いくらかという歩合制だった。その制度を変えたのが4代目を継いだ現在の喜三郎社長で、5人兄妹の長男だった喜三郎社長は父親から家業を継ぐように言われていたため、大学を卒業するとすぐに浅草の家具販売店に入社。その後、間もなく父親とともに経営に携わり、1976年(昭和51年)には父親に進言して職人の給料制度を月給制に改めた。歩合制を取りやめたのは、「金がほしいためにいい加減な仕事をして早く1棹を仕上げってしまう弊害が

あったから」と喜三郎社長は打ち明ける。歩合制から月給制への移行で、職人からの反対はなかったのかを聞くと「その頃は松江町の工場で働く職人も多くなり、自宅で作業する職人からも文句が出ず問題はなかった」と言う。

喜三郎社長が進言して実現させたのは、この給与制度だけでなく建物の改築がある。小売り店舗となっていた新富町と松江町の工場を相次いで取り壊し、ビルに建て替えた。新富町ビルはショールームとして生まれ変わり、工場も職人が分業して働ける環境に整え、販売網も川越市内近辺から飛び出して全国展開に乗り出している。卸と小売りの両面作戦だが、全体的に桐箆笥の販売数量が落ちているものの「この数年は販売単価が落ちないでいる」と話す。

今が一番厳しい時代

新富町のショールームには、天皇妃殿下が輿入れの際に持参した桐箆笥の複製が展示されている。製作したのは当社の職人となっている伝統工芸士の加藤隆康さんで当時、春日部の桐箆笥職人だった。その後、当社で桐箆笥作りの主要な工程である組み立てを担当しているが、昔からの技法や伝統を守り続けている。加藤さんによると、「昔は小遣い程度



新富町のショールーム



工場内で髻を入れる伝統工芸士の加藤隆康さん

の手間賃で4年ほど見習い修業したが、今でも材料を適材適所で使うことは難しい。木を削って組み合わせるにしても、季節によって狂いが出てくるもので、先々のことを計算して削るのがコツ。何より上質の桐を使わないと良い箆笥はできない。その意味では、経営者が外材を使わずに会津産の桐にこだわっていることは職人として誇れる」と話す。

今年で創業125年となる当社だが、「一つの業種でこれだけ長い期間続けてこられたことは、商売替えをしなかったことが大きな要因だと思う」と喜三郎社長。昭和時代の高度成長期には洋風の家具に人気集中、多くの桐箆笥業者が製造品を食器戸棚やテーブル、洋箆笥に切り替えていく中でも、一貫して桐箆笥の製造に特化。「今思えば同じように商売替えをしていたなら、多分生き残っていないだろう」と振り返る。長い歴史の中で苦しい時代を幾度も乗り越えてきたが、「本当に苦しいのは今の時代かもしれない」と言う。

桐箆笥を置く場所に困る住宅事情の中で、1棹が最低でも30万円、高いものでは100万円を越す箆笥を買い求める客はそうそういない。

「これからの時代、売れ筋となっている60-70万円の商品単価をいかに引き上げていくかが販売戦略になってくる。最大のメリットは、製造元なのでデパートなどで買う値段よ



美智子妃殿下が輿入れの際に持参した桐筆筒の複製の前に立つ4代目喜三郎社長＝新富町のショールーム

り半額になるということ。そのことを最大限PRしなければ」と、割安であることをもっと宣伝したいと言う。固定客の紹介で購入者が広がる口コミ販売で実践しているが、まだまだ割安感をアピールできないでいるようだ。

かと言って、売り上げを増やすために新しい事業展開に乗り出すことには消極的で、「先代の父親が口癖に『筆筒屋とオデキは大きくなると潰れる』と言っていたが、中身を充実させないで大きくなっても駄目だ。それよりも桐筆筒と言う伝統工芸を保存していくことが自分の使命だと思っている。会社が大きく伸びる可能性は低いものの、『ただで動くのは地震と風だけだ』と言い伝えられていた言

業を大事にして、お客を紹介してもらったら必ず言葉だけでなく、何らかのお礼をしていけば、必ず生き残っていける」と信じている。

ただ気がかりは、後継者。子供はいるものの3人姉妹で長女と3女は嫁ぎ、次女だけが税理士として活躍している。家を継いでほしい長男がいないため、次女に婿を取って家業を譲りたいと願っているが「こればかりは…」と、苦笑いする。しかし、川越の桐筆筒と言う伝統工芸を守り続け、後世に伝えていくことが最大の使命と肝に銘じて家業を継続していく決意でいる。(文中、一部敬称略)

会社概要

社名	合資会社桔梗屋筆筒店
所在地	川越市松江町1-19-3
TEL	049-222-0347
FAX	049-223-1731
創業	1884年(明治17年)
資本金	19万円
従業員	15人
事業内容	桐筆筒製造・販売
ショールーム	川越市新富町1-6-4

合資会社桔梗屋筆筒店略歴

年号	和暦	主な出来事
1884年	明治17年	初代喜三郎が川越市松江町で創業
1909年	明治42年	喜三郎死去
1943年	昭和18年	2代目栄吉死去
1947年	昭和22年	個人商店から合資会社に移行
1955年	昭和30年	川越市新富町に土地を購入。小売り店舗とし、松江町の建物は製造部門に特化する
1975年	昭和50年	新富町店舗を改築、ショールームとする
1976年	昭和51年	4代目喜三郎の進言で、職人の給与を月給制にする
1980年	昭和55年	松江町の建物を改築、本社・工場とする
1991年	平成3年	3代目常吉死去、喜三郎社長が4代目を継ぐ